

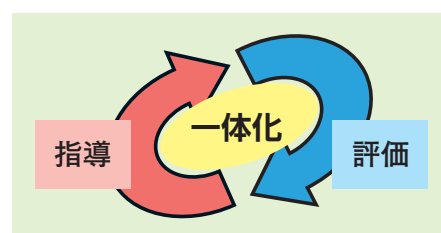
5章

評 価

1 評価とは

(1)評価とは授業の点検作業

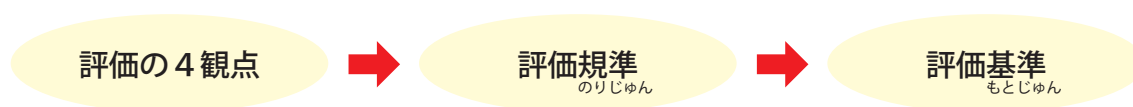
意識している、していないにかかわらず、教員は生徒に指導した内容がどの程度定着しているかを常に見ている。例えば、礼法を教えた場合、毎時間の礼の仕方を見て、できていなければできていないところを再度指導する。そして再度指導したことが改善しているかどうか、それも見ている。このように指導と評価は表裏一体となって授業が展開している。その意味では評価は授業の点検作業と位置付けることができる。そこで学習内容（教員から見ると指導内容）を効果的に定着させるためには、単元全体を見通して計画的、意図的に評価を行う機会をつくり、学習内容の達成状況を把握しながら指導を改善することが重要となる。



(2)評価の仕組み

評価は学習状況を分析的に捉える観点別評価とそれを総括した評定とに分けられる。いずれも学習指導要領に示された目標に準拠してその到達度を絶対評価で行う。その際、3つのモノサシを使ってその到達度を判断する。

絶対評価の3つのモノサシ



① 評価の4観点

学習内容は「技能」「態度」「知識、思考・判断」の3つに分けられ、それを「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能」「知識・理解」の4つの観点から評価する。新学習指導要領の改訂に向けた動きの中では、学力の3要素に合わせて学習内容と評価の観点を整合する方向性が示されている。



② 評価規準（のりじゅん）と評価基準（もとじゅん）

学習内容の到達度を「生徒の姿」として表現したものを評価規準（のりじゅん）という。生徒の動作、行動、仕草など「見た目」が基本となる。その到達度にA・B・Cのランクを設けたものを評価基準（もとじゅん）という。評価基準のB（おおむね満足な状況）の「生徒の姿」が評価規準となる。

具体例をあげると、技能の「膝車」の場合、「膝車をかけて相手を投げることができる」を評価規準とすると、評価基準のA（十分に満足）は「スムーズにタイミングよく膝車をかけて相手を投げることができる」、B（おおむね満足）は「膝車をかけて相手を投げることができる」、C（努力を要する）は「動きを確認しながら膝車をかけて相手を投げることができる」となる。これはあくまで一例であるが、生徒の実態を踏まえ、より具体的に生徒の姿が思い浮かぶように評価規準や評価基準を作成することが大切である。学習指導案等を作成する場合は評価規準を用いて観点別に評価のポイントを示すことが一般的である。

以下、評価規準のヒントとなる「見た目」の「生徒の姿」の具体例を観点別に示す。「関心・意欲・態度」では、「〇〇しようとしている」という表現を用いて関心や意欲の目に見えない内面をあらわしているが、健康・安全の項目だけは実際に「〇〇している」という「見た目」の表現になっている。これは健康・安全の確保を特に重視していることが理由として挙げられる。

○関心・意欲・態度

- ・運動への取り組み
- ・公正・協力・責任・参画の態度
- ・健康・安全にかかわる態度

取り組もうとしている 楽しもうとしている
大切にしようとしている 協力しようとしている
注意している 気を付けている

○思考・判断

- ・課題の設定
- ・課題解決のための練習内容の決定
- ・練習方法（場）の工夫

課題を 選んでいる 見つけている
内容を 選んでいる 決めている
やり方を 選んでいる 工夫している

○技能

- ・技能の習得
- ・技能や記録の向上

〇〇をかけることができる 使っている
上達している 高まっている

○知識・理解

- ・運動の特性やねらい
- ・名称やルール

言ったり 書き出したりしている
言ったり 書き出したりしている
具体例を挙げている

③ 評価と評定

評価は毎時間の授業の点検作業であるとともに、最終的には各種目の「観点別評価」の総計を「評定」に変換することが求められる。その際、評定が「技能」に偏重せずに「技能」「態度」「知識・思考・判断」のバランスがとれていることが大切である。そのためには評定を出すときの観点別評価の合算の仕方を工夫するとともに、評価・評定の前提となる各種目の学習内容の特定を適切に行うことが重要となる。

④ 学習内容の特定

信頼性の高い評価を行うためには評価の前提となる種目ごとの学習内容の特定が重要となる。各学校の教育目標や保健体育科の指導の重点項目を踏まえ、その種目の特性を生かし、何を重視して指導するか、学習内容をよく精査して特定することが大切である。

例えば、武道の授業では礼法や安全への態度を重視するなど、学習指導要領に示された「技能」「態度」「知識、思考・判断」の学習内容から、他の種目との関連やバランスを考えて取捨選択し、各学校の実態に合った学習内容を特定する。

特に武道を初めて習う第1学年では、学習指導要領上は第1・2学年に示されている学習内容の中から何を特定して指導するかが重要となる。例えば、技能の学習内容は「技ができる楽しさや喜びを味わい、基本動作や基本となる技ができる」と示されている。これを達成するために第1・2学年で例示されている技の中から、抑え技のみを扱うか、投げ技を扱う場合でも技を1つか2つに限定するなどして、技数の習得よりも安全面や柔道の楽しさに触れることを重視する視点で学習内容を特定することが大切である。

学習指導要領が示す学習内容 「技能」

	中学校1・2年	中学校3年・高校1年	高校2・3年
技 能	・ 技ができる楽しさや喜びを味わう ・ 基本動作や基本となる技ができる	・ 技を高め勝敗を競う楽しさや喜びを味わう ・ 得意技ができる	・ 技を高め勝敗を競う楽しさや喜びを味わう ・ 得意技を用いた攻防が展開できる

学習指導要領が示す学習内容 「態度」

	中学校1・2年	中学校3年・高校1年	高校2・3年
態 度	・ 武道に積極的に取り組む ・ 相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を守ろうとする ・ 分担した役割を果たそうとする ・ 仲間の学習を援助しようとする ・ 健康・安全に気を配る	・ 武道に自主的に取り組む ・ 相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にしようとする ・ 自己の責任を果たそうとする ・ 互いに助け合い、教え合おうとする ・ 健康・安全を確保する	・ 武道に主体的に取り組む ・ 相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にしようとする ・ 役割を積極的に引き受け、自己の責任を果たそうとする ・ 互いに助け合い、教え合おうとすること及び合意形成に貢献しようとする ・ 健康・安全を確保する

学習指導要領が示す学習内容 「知識」

	中学校1・2年	中学校3年・高校1年	高校2・3年
知 識	・ 武道の特性や成り立ち ・ 伝統的な考え方 ・ 技の名称や行い方 ・ 関連して高まる体力などの理解 ・ ごく簡単な試合の仕方	・ 伝統的な考え方 ・ 技の名称や見取り稽古の仕方 ・ 体力の高め方 ・ 運動観察の方法の理解 ・ 簡単な試合の仕方	・ 伝統的な考え方 ・ 技の名称や見取り稽古 ・ 体力の高め方 ・ 課題解決の方法 ・ 試合の仕方

学習指導要領が示す学習内容 「思考・判断」

	中学校1・2年	中学校3年・高校1年	高校2・3年
思考・判断	・課題に応じた運動の取り組み方を工夫できる	・自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫できる	・自己や仲間の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫できる

2 評価の実際

評価の仕組みや重要性は理解しても、実際には評価の機会が増えることで授業が評価に追われ、評価のための評価に陥りかねない。現場では評価活動の工夫・改善が大きな課題となっている。ここでは現場主義の視点から現実的で効率的な評価の工夫について述べる。

(1) 単元計画と評価計画をセットで作成する。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
単元計画	オリエンテーション 学習計画を確認する	基本動作と 受け身を習得する		基本動作と受け身を 習得する	固め技の抑え方と 応じ方を取得する 相手の動きに応じた 基本動作と受け身を 習得する		学習した抑え技を 使用して相手との 攻防を楽しむ	投げ技を習得し、 動きの中で学習した 技ができる楽しさを 味わう		まとめ
評価計画				●	○	○				
関				○						
思		○		●						
技										
知	●						●			

ノート点検

① 単元計画をもとに何時間目にどの観点の何を評価するかを予め決める。

- ・評価方法は「観察」（○）と「学習ノートの記録」（●）で行う。
- ・評価項目は1時間に1つ以内に絞る。

② 観点別の評価方法と評価時期の参考例

評価観点	評価時期	評価方法
関心・意欲・態度	指導日の後	観察（発言）・学習ノート
思考・判断	指導した日	観察（発言）・学習ノート
技能	指導日の後	観察・学習ノート
知識・理解	指導した日	観察（発言）・学習ノート

(2) 観察を工夫する。

- ① 「関心・意欲・態度」と「技能」は指導日より後に継続的な観察を行う。その際、全体状況と個人状況の2観点で観察する。全体状況を見て評価基準Cが多い場合はその場で全体指導を行う。少ない場合は可能な範囲でCの生徒の個別指導を行う。継続的な観察ではCのみを把握する。
- ② 「関心・意欲・態度」は単元中盤、「技能」は単元終盤に総括的な評価日を設定する。
その際、AとCの生徒を把握する。それ以外はBとなる。
- ③ 安全面の観察は常時行い、危険な場面があればその都度指導を徹底する。

(3) 学習ノートを工夫する。

- ① 学習ノートは毎時間授業終了後に記入させる。
- ② 4観点を読み取れる仕組みを取り入れて評価を総括する時の補足資料とする。
- ③ 自己評価と相互評価を記録させることで教師の評価を補う資料とする。

【具体例】

「関心・意欲・態度」（取組、公正、協力、責任、参画、健康、安全）

各要素をA B Cで自己評価する。グループ内でAの人を選ぶ。

「思考・判断」（課題の設定、課題解決の練習の選択、練習方法（場）の工夫）

指導した日に工夫したことや考えたことを記録させる。観察から得た生徒の行動や発言等を補完する資料とする。

「技能」（技能習得、技能向上）

習得した技をA B Cで自己評価する。グループ内でAの人を選ぶ。

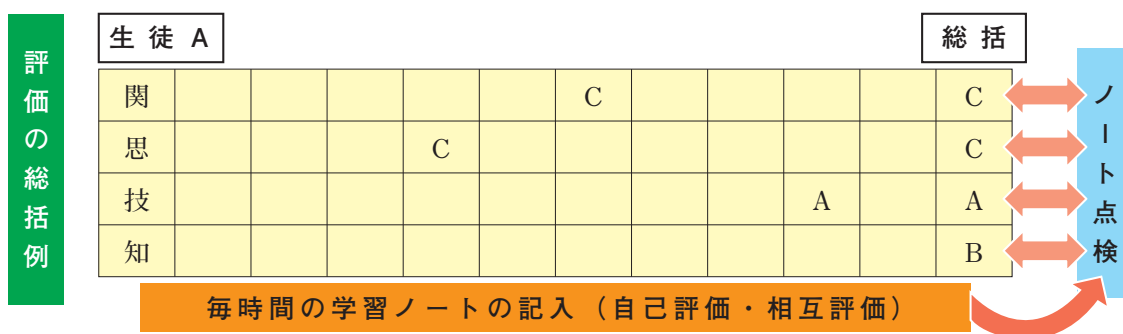
「知識・理解」（運動の特性やねらい、技の名称やルール）

指導した日に学んだ知識や理解した内容を記録させる。観察から得た生徒の行動や発言等を補完する資料とする。

(4) 評価の総括を工夫する。

- ① 項目ごとに評価を総括する。
 - ・評価は基本的に評価基準のAとCを記録する。記録のないものがBとなる。単元が終了して観点別に評価を総括する時に学習ノートを点検する。学校や保健体育科で定められている方法に従って総括を行う。その際、学習ノートの記載事項や生徒の自己評価、相互評価を参考にする。
 - ・「関心・意欲・態度」と「技能」は指導日以降の継続的な観察でCの生徒を把握し、総括的な評価日にAとCの生徒を記録する。その際、学習ノートの自己評価や相互評価を参考にすることで評価の信頼性を高める。
 - ・「思考・判断」は指導日に観察を行い、AとCを記録する。その際、学習ノートの記載事項を参考にすることで評価の信頼性を高める。
 - ・「知識・理解」は、指導日の学習ノートの記載事項を参考にAとCの評価を行う。
 - ・同じ項目の複数の評価を総括する場合は、単純に平均値を取るのではなく、単元の後半の評価

に重点を置いたり、同じ項目の要素の中でもより重点を置いている評価を生かすなど、予め総括の仕方に共通理解を図っておくことが大切である。



② 観点別評価から評定への総括を工夫する。

- ・学校ごとに定められた方法や手順によって、学期末や年度末に各単元の観点別評価を総括し、その観点別評価をもとに評定を出すことになる。その際、A B C評価をそのまま用いて総括を行う場合と、A B Cを点数に置き換え、得点化して総括を行う場合がある。いずれにしても、効率的で妥当性のある総括の仕方を学校や各教科が工夫改善する必要がある。
- ・単元（種目）や評価項目に重点を置く場合は、学校の特色や生徒の実態を踏まえ、学校全体の共通理解を図ることが必要である。特定の種目や技能のみに偏らないように、学習内容や評価項目のバランスを保つことが大切である。

○観点別評価と評定の総括例（A B C評価をそのまま用いて総括する方法）

【3つの単元を実施した場合の例】

	関・意・態	思・判	技	知・理	観点別評価				評定
単元A	A	A	A	A	AAAA				5
単元B	A	A	C	B	AAAC	AABB	AAAB		4
単元C	B	A	A	B	AABC	ABBB	AACC	ABBC	3
期末評定	A	A	B	B	ABCC	BBBC	BBBB		
	4				ACCC	BBCC	BCCC		2
					CCCC				1

【4つの単元を実施した場合】

	関・意・態	思・判	技	知・理
単元A	A	A	A	A
単元B	A	A	C	C
単元B	B	B	B	A
単元C	B	A	A	A
期末評定	A	A	B	B
	4			

この表の「関・意・態」と「知・理」のような場合は、観点別評価を算出した元のデータを見て、最終的に観点別評価を割り出す。

○達成度の数値設定の例（A B C評価を積算して満点に対する達成度で総括する方法）

観点別評価		評 定	
充分満足できる	A	5	特にすぐれているもの
		4	満足できるもの
おおむね満足できる	B	3	おおむね満足できるもの
努力を要する	C	2	努力を要するもの
		1	一層の努力を要するもの

80% → 50% → 90% → 80% → 50% → 20%

(5) 今後の評価の方向性

新学習指導要領の目玉はアクティブ・ラーニングである。生徒同士、生徒と教員の能動的、協働的な学習活動の推進が求められる。アクティブ・ラーニングは評価活動にも大きな可能性を秘めている。これまで観点別評価を行う場合「関心・意欲・態度」や「思考・判断」は「見た目」ではわかりづらい心の内面をどう読み取るかが大きな課題であった。グループ、トリオ、ペアなどの学習形態を多く取り入れることで、教員主導の授業では見えない「生徒の協働の姿」が見えるようになる。こうした姿から運動への取り組みや協力といった「関心・意欲・態度」の要素や課題の設定、練習方法の工夫など「思考・判断」の要素を読み取ることが期待される。いずれにしても、今後アクティブ・ラーニングの推進と効果的な評価活動が両輪となった授業づくりが求められる。

